



# 園だより

文京区立第一幼稚園  
令和2年度2月

URL <http://www.bunkyo-kyo.ed.jp/dai1-kg/>

## 幼児期の今ならではの表現を楽しむ

副園長 和島千佳子

もうすぐ節分です。ある日、年少組の保育室に行くと、鬼の面を付けた教師の姿がありました。そばにいる子供たちは「豆まきする」と小さな紙を丸めて持っています。中には小さな紙を細くし武器に見立てる幼児もいますが、鬼（教師）は「そんなものにはやられないぞ」と言い、ひるみません。ところが豆（丸めた紙）をまかれると「ああ、それはいやだ」と逃げていきます。その様子を面白と感じたのでしょうか、紙を細くしていた幼児も紙を丸めて豆にし、エイッとまきはじめ、賑やかな歓声が響きました。

年中組は、2～4人ほどの気の合う友達と一緒に、動物やヒーローなど自分たちのなりたいものになって「これ〇〇ってことね」と言い、ごっこ遊びをする姿が多く見られるようになっていきます。また、親しんだお話をもとに、学級のみんなで表現遊びをしています。お面や家、ケーキや飲み物などお話に出てくるものを先生や友達と一緒に作って遊んでいます。そのようなことを通し、一人一人の中に「こんなふうにやってみよう」というイメージが膨らんでいるようです。はじめは表現遊びに戸惑い尻込みする幼児もいましたが、だんだんと役になって楽しむようになっていきます。

年長組では、こども劇場を楽しみに準備を進めています。学級の皆でお話を決め、役を担って必要なものを作り、場面に合った動きや言葉を考えています。緑組は、「さるかに合戦」と「浦島太郎」の2つのお話が候補に挙がり、なぜその話をやりたいかなど一人一人が意見を出し合い、「さるかに」の話の中にお姫様も登場する想定で劇をすることになりました。

紫組は、何を言われても「いいから、いいから」という気のいいおじいちゃんのお話で、それに対して、どんな人がどんなことを言うとびっくりさせることができるか、みんなで考えを出し合って決め、工夫しています。さあ、どんなお話ができあがるのでしょうか。

そのような、いわば「うそっこ」の世界を楽しむことは、人が生きていくうえで非常に大切です。

翻訳家で児童文学研究家の松岡享子さんは著書「サンタクロースの部屋」に、「幼い日に、心からサンタクロースの存在を信じることは、その人の心の中に、信じるという能力を養う」と書いています。「心の中にひとたびサンタクロースを住ませた子は心の中にサンタクロースを収容する空間を作っていて、サンタクロースはいつか心の外に出て行ってしまいが、占めていた空間は心に残る。この空間に、人は成長に従ってサンタクロースに代わる新しい住人を迎え入れることができる」と続きます。

「この空間、つまり目に見えないものを信じるという心の働きが、人間の精神生活のあらゆる場面で、どんなに重要かはいうまでもない。のちに、一番崇高なものを宿すかも知れぬ心の場所が、実は幼い日にサンタクロースを住ませることによって作られるのだ。別にサンタクロースには限らない、魔法使いでも、妖精でも、鬼でも仙人でも、物言う動物でも、空飛ぶくつでも、打ち出の小槌でも、岩戸を開けるおまじないでもよい。幼い心に、これらふしぎの住める空間をたっぷりととってあげたい。」

（この本は園だより 11月号でも紹介されています）

ごっこ遊びや劇は、今ここにないものをお互いに想像し思い描くことによって成り立ちます。思い浮かべたことを描いたり作ったり、音や動き、言葉に表したりして表現し、現実にはできないことも「うそっこ」の世界の中で実現できてしまう楽しさがあります。仲間と一緒に想像を広げ表現を楽しむことから、自分の内なる世界が広がり、自己肯定感が高まります。また、自分ではない誰かになって振る舞うことや友達の表現を見ることが、相手の立場に立って考えたり、客観的に自分を捉えたりする機会にもなります。そして、現実の問題を乗り越えるためのエネルギーやアイデアを生み出すことにもつながるでしょう。

♪おにはそと、ふくはうち♪の声も高らかに、鬼（邪気）を追い払い、心の内に福を迎えたいと思います。春はもうすぐです。